

自主研究報告書

# 「藍染め用蓼藍(たदैあい)の 育成及び藍染め」

2020年2月5日

自主講座 花卉コース 第5班  
(指導 園芸科教授 金子黎次)

## ①テーマ

「藍染め用蓼藍(たदैあい)の育成及び藍染め」

## ②メンバー

古幡史朗(リーダー)、佐藤秋子、枝川政子、常田信行、  
西野充、武井康子、茗荷進、今村恵津子、加藤楓、  
二宮安紀子、橘井昭雄、小田切信秋

## ③主な研究内容

- ・種まき
- ・液肥1,000倍、1,500倍を与えた2種類の育成の違い
- ・生葉染め、古葉染めの染物の相違

## 活動実績

4月17日（水） ・ テーマ決定

5月29日（水） ・ 藍の種類並びに藍染めの方法について講習会を開催

（講師：柏市あけぼの山農業公園ハーブの丘リーダー、  
藍染め教室講師の池田先生）

（場所：松戸市総合福祉会館内）

・ 藍の種まき（育苗ポットを利用）

⇒各自持ち帰り3か月間育苗

8月28日（水） ・ 各自が育苗した蓼藍を使用した生葉染め（なまはそめ）の実施

（ストールとハンカチを染める）

12月11日（水） ・ 刈り取り乾燥させた蓼藍の葉を使用した古葉染めの実施

（ストールとハンカチを染める）

# 藍の種類

藍の葉にインジカンという色素が含まれており、藍染めの原料とされてきた。

## ①インド藍

マメ科の灌木、インド原産。

## ②なんばんこまつなぎ

インド藍と同系統、メキシコなど中南米のデルタ地帯のみ。

## ③琉球藍(りょうきゅうあい)

沖縄の紅型、かすり織物に使用、インド・タイ原産地。

## ④蓼藍(たであい)

ジャパンプルーという染色、中国・インドシナ半島原産。

(今回の自主研究では蓼藍を使用)

# 蓼藍を育成し、生葉染めと古葉染めの2種類に挑戦しました。

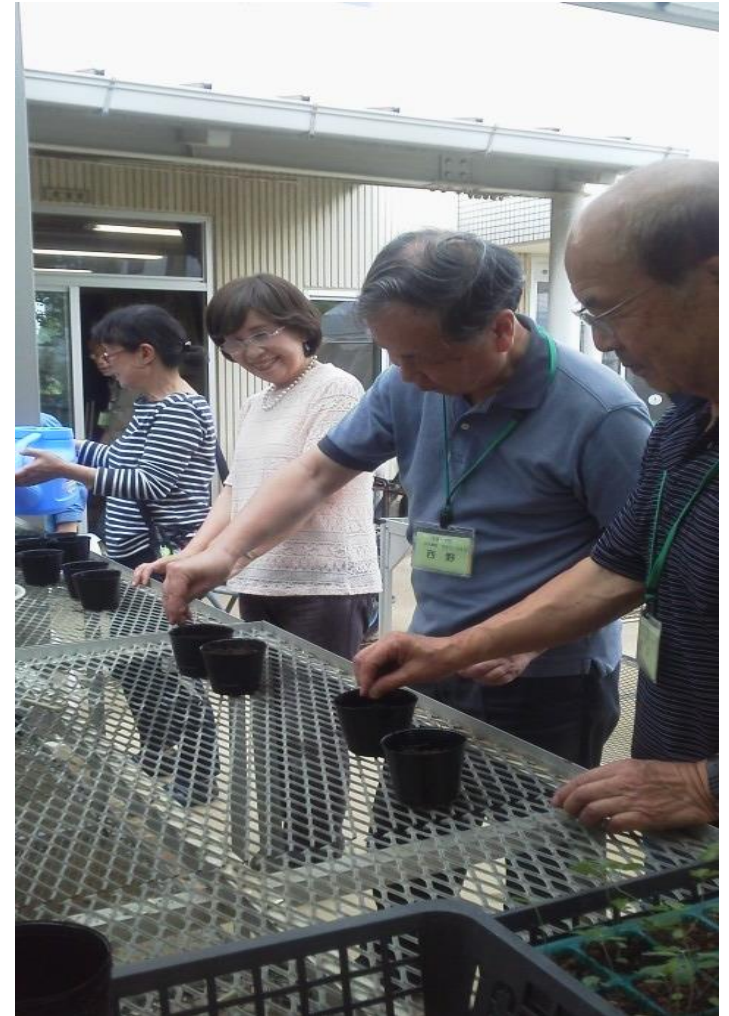
## ・種をまく

昨年、柏市酒井根地区で摂取した蓼藍の種を使用。各自ポット2個に3~4粒ずつまく。

## ・育成のポイント

液肥 aポットー1,000倍希釈液

bポットー1,500倍希釈液



# (1) 蓼藍の育成に関する研究結果と考察

## ① 蓼藍の育成結果

5月29日に、同じ種、用土、容器を使用したにもかかわらず、8月27日の段階で生育に大きな差が生じた。上手く行かなかったメンバーにヒアリングした結果、上手く生育しなかった原因としては、

種のまき方(深すぎた)、

ポットの場所(陽当たりがあまり良くない)、

水やり不足(藍は水を好む)、

鉢上げのタイミングが遅かった、

肥料の過不足

が考えられる。

なお、蓼藍の種まきの時期としては、3月が最適と言われている。

## ②液肥の希釈の違いによる育成の違い

8月28日の生葉染めに使用するため、液肥(1,000倍希釈液、1,500倍希釈液の2種類)を2週間に一度与えて成長の度合いを比較した。

次ページのメンバー(枝川さん)の栽培記録をみると、

1,500倍希釈液を与えた方が、1,000倍希釈液を与えたものより、苗の高さが高く、初期の成長率が高かった。

また、別のメンバーの栽培においては、1,000倍希釈液を与えたものの方が、葉が濃く、葉の数が多い結果となった。

従って、どちらが良いという結論にはならなかった。

# 藍の栽培記録(枝川さん)

播種日:2019年5月29日 容器:プランター

移植日:2019年7月5日(梅雨明け)

観察の視点:施肥量による成長の違い、及び

液肥濃度(1,000倍、1,500倍)による違いを観る

	施肥日	施肥量		施肥日	施肥量
1	7月13日	各500mℓ	4	8月7日	各500mℓ
2	7月25日	同上	5	8月18日	同上
3	7月31日	同上	6	8月26日	同上



# 苗の高さ(測定結果)

1,000倍(白プランター) 1,500倍(茶プランター)

(単位:cm)

	A	B	C	D	E	F
7月 5日	5.3	5.0	8.5	2.5	5.8	4.3
7月13日	10.3	10.7	15.1	5.3	13.6	8.0
7月25日	14.3	22.5	16.8	20.0	16.2	25.3
7月31日	18.0	22.9	18.5	22.3	19.6	26.1
8月 7日	20.8	26.5	21.2	36.5	25.5	27.0
8月18日	31.8	34.2	29.8	45.2	34.2	34.5
8月26日	37.0	40.5	37.5	49.1	38.0	37.7

## (2) 生葉染めと古葉染めの染物の相違についての結果

生葉染め、8月28日に浅間台校舎において作業実施。

- ①使用する材料 各自持ち寄りの収穫蓼藍の葉
- ②染める物 シルクの布(ショール8枚、ハンカチ10枚)
- ③用具 ミキサー、洗面器、タオル、ネット、  
ビニール手袋、エプロン
- ④溶液 消石灰、ハイドロ水溶液、オキシドール  
(藍熊染料(株)/浅草にて購入)

# 生葉染めの工程

- ①茎より葉をとる 50～70g
- ②ミキサーに7分目葉を入れ水700ccを加える
- ③約1分ミキサーにかける
- ④ネットで漉す
- ⑤液をよく絞り取る
- ⑥消石灰上澄み200ccとハイドロ水溶液50ccを入れてよく混ぜる
- ⑦下処理したハンカチ、スカーフを液に入れ10分程ムラにならないようよく動かして染める
- ⑧流水で水洗いし発色させる
- ⑨乾かした後に、色落ちしないようオキシドール液に10分程浸す
- ⑩水洗いした後乾かす

# 8月28日の生葉染の様子(3)





# 各自の生葉染した作品(1)



# 古葉染め

12月11日の生葉染め、午前11時より浅間台校舎において作業開始。

- ①使用する材料 : 各自持ち寄りの収穫蓼藍を刈り取り乾燥させた葉
  - ②染める物 : シルクの布(ショール8枚、ハンカチ10枚)
  - ③用具 : 携帯ガスコンロ、鍋、ネット、洗面器、タオル、ビニール手袋、エプロン
  - ④薬品
    - a)インディゴ還元剤A2スペシャル(調合済みのセット品)
    - b)酢酸
- (a,bとも藍熊染料(株)/浅草にて購入)

# 古葉染めの工程

- ① 乾燥させた葉を90度のお湯(5リットル)で10分間煮て、漉した溶液を捨てる。
- ② ①で煮た葉にインディゴ還元剤を50CCを加え、60度のお湯で10分間煮る。
- ③ ②からネットで漉した溶液(40度～50度)にストール、ハンカチを5分間漬ける。これを絞った後に同様に3回繰り返す。
- ④ ③で漬けたストール、ハンカチを水5リットルを加えた酢酸(25CC)に漬けたあと、水洗いし、乾燥させる。



# 12月11日の古葉染めの様子(2)





# 各自の古葉染めした作品(4)



# 生葉染めと古葉染めの相違点

- ①生葉染めができるのは、葉を収穫できる7月下旬から9月中旬に限られる一方、古葉染めは収穫した葉を乾燥させた後に保存すれば、いつでもできる。
- ②生葉染めは生葉に含まれるインディカンと酵素が反応し、インドキシルに変化して繊維に染み込み、酸化してインディゴに変化し、そして青く染まる(濃い色は出せないが青みの強い爽やかな藍色となる)。一方、古葉染めは乾燥させた葉を煮出してインディカンを先に取り出し、そこに新たに酵素を加えることで濃い青色に染色することができる。
- ③煮出す古葉染めは、生葉染めのミキサー処理よりも多くインディカンを取り出すことができ、たくさん染めることができる。

## 最後に、反省点など

- ①藍染め(生葉染め、古葉染め)の方法については習得することができ、メンバー全員がストールないしハンカチの染物の作品をうまく作ることができた。
- ②しかしながら、蓼藍の栽培において、種まきの後、各自が持ち帰った以降の記録の取り方の統一様式を用意しなかったため、詳細な比較検討ができなかったことは反省点。
- ③また、今回は藍染めの方法を研究することにウェイトをかけてしまったため、蓼藍の栽培において、液肥の希釈度の違いによる生育の比較を研究するほかに、例えば用土、置き場所、水やりの頻度、鉢植えと地植えの違いなど、条件を変えて比較するといった研究も行うと良かった。
- ④種まきの時期については、本来3～4月に種まきすべきであったが、今回は5月末日に行ったため、発芽後の日光不足で発育不全が見られた。